

アイドルファンを対象とした推し変態度尺度の作成

脇本 竜太郎¹・吉村 萌南²・馮 曉璐²

(¹ 明治大学・² 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科)

問題と目的

「推し活」の普及

- ・ユーキャン新語・流行語大賞へのノミネート
- ・日本人の約25%が推し活、市場規模は4.1兆円 (推し活総研、2026)

「推し」に関連する研究

- ・ファン心理とファン行動 (小城, 2018)
- ・Parasocial Relationships (Tukachinsky et al., 2020)

「推し変」

- ・推しとの関係は一定ではなく、変化や移行を伴うこともある
 - 推す対象を変更すること：推し変
- ・推し変は、魅力的な代替対象の登場やスキャンダルを契機に真剣に語られることもあれば、軽い冗談として語られることもある
 - ⇒推し変は複数の側面から構成される可能性

「推し変」に関連する概念ならびに知見

(1)Parasocial Breakups (Cohen, 2003)

- ・メディア上の人物とのParasocial関係が、放送の終了等により終了すること
 - ⇒関係の終了を扱うが、能動的な推し変は射程外

(2)スキャンダルの影響に関する研究

- ・スキャンダル後にファン離脱が生じうる (小城・薊・小野, 2010)
 - ⇒推し変は必ずしもスキャンダルの発生を前提としない

- ・先行研究の知見のみでは推し変を十分に捉えることができない
- ・推し変そのものに焦点を当てた研究が必要
 - ⇒その第一歩として、本研究はアイドルファンを対象に、推し変に対する態度を多次元的に捉える尺度を作成する。

方法

調査対象者

- ・株式会社クロス・マーケティングの登録モニタ(15歳から69歳)
- ・インフォームド・コンセントを得た後に現在一番推している・応援している実在の人物の職業と名前の回答を求めた
 - 職業を「アイドル」と回答した男女150名ずつに本調査を配信
 - 非実在の人物名やアイドル以外の人物名を書いた者を除外
 - ⇒分析対象は278名(男性133名、女性145名、平均年齢 37.34歳、 $SD = 14.53$)

調査項目

①推し変態度尺度項目

- ・SNSならびにWeb上から推し変に関する記述を集め、35項目を作成
- ・現役アイドル(第二著者)とアイドルのマネージャー経験者(第三著者)が表面的妥当性を確認
- ・項目から推しへのロイヤルティ、心理的抵抗感、推し変への道徳的評価、推し変の容認、推し変レディネスの5因子を想定

②ファン心理尺度

- ・小城(2018)のファン心理尺度のうち、育成の使命感($\omega = .84$)、ファンコミュニケーション($\omega = .93$)、流行への同調($\omega = .89$)を使用。

③特性的自己効力感

- ・重松ら(2022)の新版特性的自己効力感尺度日本語版を使用($\omega = .96$)。

※項目に1 (あてはまらない)～5 (あてはまる)の5段階で回答を求めた。

※②と③は、推し変態度尺度の弁別的妥当性を予備的に検討するために用いた。

結果と考察

推し変態度尺度の構成

- ・因子分析(最尤法、プロマックス回転)を実施
 - 当初想定した5因子解では単純構造が得らず。
 - MAP基準およびBIC基準は3因子解を示唆
 - ...因子の分化が十分でなく、解釈可能性に課題
 - 解釈可能性の観点から4因子解を採用
 - ...第1因子は心理的抵抗感(6項目、 $\omega = .91$)、第2因子は推し変の許容(7項目、 $\omega = .88$)、第3因子は推しへのロイヤルティ(6項目、 $\omega = .88$)、第4因子は推し変レディネス(4項目、 $\omega = .78$)と命名。

推し変態度尺度下位尺度間の関連

- ・各変数の平均、標準偏差、相関係数を表1に示した。

表1.各変数の平均値、標準偏差ならびに相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6	7
1 心理的抵抗感	2.87	0.95							
2 推し変の許容	4.13	0.67	-.42						
3 推しへのロイヤルティ	3.83	0.71	.46	.05					
4 推し変レディネス	3.79	0.82	-.34	.44	-.17				
5 育成の使命感	2.67	0.88	.42	-.43	.27	-.11			
6 ファンコミュニケーション	3.11	0.93	.30	-.20	.36	-.10	.54		
7 流行への同調	2.71	0.83	.22	-.31	.15	-.01	.60	.51	
8 自己効力感	3.00	0.98	.15	-.12	.22	.06	.41	.37	.27

- ・心理的抵抗感と推しへのロイヤルティ($r = .46$)、推し変の許容と推し変レディネス($r = .44$)の間には中程度の正の相関
- ・心理的抵抗感と推し変の許容($r = -.42$)、推し変レディネス($r = -.34$)の間には中程度の負の相関
- ・推しへのロイヤルティと推し変の許容($r = .05$)、推し変レディネス($r = -.11$)との間には一貫した関連は見られなかった。
 - ⇒推し変に対する態度が単次元ではなく複数の側面から構成されることを示唆
 - ⇒推しへのロイヤルティと推し変の許容、推し変レディネスは併存しうることを示唆

ファン心理、自己効力感との関連

- ・心理的抵抗感ならびに推しへのロイヤルティは育成の使命感($r = .42, .27$)、ファンコミュニケーション($r = .30, .36$)と正の相関
- ・推し変の許容は育成の使命感($r = -.43$)、流行への同調($r = -.34$)と中程度の負の相関
- ・特性的自己効力感と推し変態度下位尺度の関連は最も大きいものでも $r = .22$
 - ⇒推し変態度はファン心理や特性的自己効力感とは別の概念であることを示唆

課題

- ・妥当性の追加検証が必要
 - スキャンダル時の反応や他者の推し変への評価との関連
 - ファン行動との関連
- ・因子構造の再現性確認
- ・他のファン対象への適用可能性の検討

参考文献

Cohen, J. (2003). Parasocial Breakups: Measuring Individual Differences in Responses to the Dissolution of Parasocial Relationships. *Mass Communication and Society*, 6, 191–202. /小城英子 (2018). ファン心理尺度の再考. *聖心女子大学論叢*, 132, 182–224. /小城英子・薊理津子・小野茜 (2010). スキャンダルとファン心理. *聖心女子大学論叢*, 114, 166–200. /推し活総研 (2026). 【推し活総研2万人調査】推し活人口2000万人へ、最新レポートを公開. note. Retrieved April 21, 2026 from <https://note.com/oshikatsusoken/n/n891ccd4bac7b> /重松潤・波光 涼風・神原 広平・村上 理子・尾形 明子 (2022). 新版特性的自己効力感尺度日本語版 (NGSE-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 日本心理学会大会発表論文集, 86, 1PM-007-PB. /Tukachinsky, R., Walter, N., & Saucier, C. J. (2020). Antecedents and Effects of Parasocial Relationships: A Meta-Analysis. *Journal of Communication*, 70, 868–894.